

トゥデーラのベンジャミンの旅書簡（1）

—トゥデーラからロードスまで—

関 根 謙 司*

Abstract

Benjamin of Tudela, a medieval Sephardic merchant, traveled all over the Mediterranean world including both Christian areas and Moslem ones. The twelfth century of his lifetime was not only a magnificent time in which the international commerce would develop but also an intolerant time which did not permit other religions. Especially in the Christian European world, the Crusade was organized against the Islamic world, the cathars, and also the Jews. Proceeding the Reconquista in the Christian Spain, Benjamin, born in Tudela after the success of Reconquista of Navarra, visited many Jewish communities from 1159 or 1160 to 1173.

He wrote many documents in Hebrew about many Jewish communities in many towns and cities where he stayed. Writing in Barcelona, Narbonne, Lunel, Marseille, Pisa, Lucca, Roma, Salerno, Taranto, Orie, Otranta, Thebes, Salunki, Cyprus, Antioch, Beirut, Tyre, Haifa, Nablus, Jerusalem, Askalon, Tiberias, Damascus, Aleppo, Baghdad, Sura, Pumbeditha, Khuzestan, EL-Cathif, Cairo, Gizeh, Alexandria, Messina, Palermo and Tudela, his documents became a famous travel book titled *Sefer ha-Massa'ot*.

In my article (part 1) here, I translated and summarized his travel book into Japanese from Hebrew. I tried to introduce the times he lived in by checking other historical documents and studies. In the part 1 I treated the Christian world, and I will treat the Islamic world in the next article (part 2).

Key Words : Benjamin of Tudela, Tudela, Medieval, Sephard, Sefer ha-Massa'ot, Hebrew, Spain, France, Italy, Greece

Documental letters of Benjamin of Tudela (1) —From Tudela to Rhodus—

* Kenji Sekine

Correspondence Address : Department of Business Administration, Bunkyo Women's University, 1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533, Japan.

Accepted October 26, 1999.

Published December 20, 1999.

1. ユダヤ商業都市としてのトゥデーラ

交易と商業で地中海世界に君臨したカルタゴが海を舞台としたならば、ユダヤ教徒は河川⁽¹⁾を利用したといってもいいだろう。それほどに彼らの商業活動の場には、必ずといっていいほど、河川があった。世界規模で商業活動が活発化する12世紀以降の中世の時代にそれはとくに顕著に見られ、ユダヤ教徒が活躍したことで知られる南ドイツのラインラントの都市であるマインツやウォルムスは、活発な商業活動に呼応して文化の興隆も見られた。ユダヤ商業都市の発展に伴いユダヤ諸学なども活発化することは、アンダルシアのコルドバやセビリャ、メソポタミヤのスーラやブンバディテ、あるいはエジプトのフスタートやファイユームを見ても分かる。マインツやウォルムスのライン川、コルドバやセビリャのグアダル・ケビール川、スーラやブンバディテのユーフラテス川、フスタートやファイユームのナイル川は、ただ単に河川というだけではない。商業活動に欠かせない交通路としての河川の役割を担っていたことに注目したいのである。

セファルドもアシュケナージも⁽²⁾、河川に依存する理由はいろいろ考えられるが、彼らの故郷を偲ばせるものが河川だったという見解もあるだろう。歴史的にある民族が移住する際に、不思議とかつて自分たちが住んでいた町や村に近い自然環境を求める。その意味では、地中海世界に点在するユダヤ共同体はヘブロン川への郷愁であったという見解も可能である⁽³⁾。また、より現実的な見解としては、商業に携わる民として、交通手段としての河川は大きな役割を果たしてくれたことも関係していることは想像に難くない。しかし、商業的必要性を超えた存在として、河川が大きな意味をもっていたことは興味深い。本稿で取り上げる商人にして旅行家のトゥデーラのベンジャミン Benjamin de Tudelaもサラゴッサからトルトサまではエプロ川⁽⁴⁾の船⁽⁵⁾を利用している。

ADIOS RIO EBRO
REGRESARE
AUNQUE SOLO SEA
PARA MORIR
A TUS ORILLAS

さらば、エプロ川よ
戻ってきてくれ
たとえ おまえが
おまえの耳元で

死ぬときは
一人であっても⁽⁶⁾

これは現在、トゥデーラ市にあるベンジャミンのモニュメントにもヘブライ語とカスティーリャ語⁽⁷⁾で刻まれている。ベンジャミン自身はトゥデーラ市のエブロ川沿いのユダヤ地区に住んでいたと想像されるが、この詩自身はベンジャミンの作品ではないが、当時のトゥデーラに住むユダヤ教徒の心理を言い表しているものであることには変わらない。

1492年以前、スペインに住むセファルドたちの活動の場は、3つのエリアに分けられていた。1つはイスラーム支配地、いま1つはモサーラベ支配地、そしてもう1つはキリスト教徒支配地である。1031年にイベリア半島で優勢を誇った後ウマイヤ朝 al-Dawla al-Umayyūn fi al-Anadaluṣ が滅び、小王国分裂時代 Mulūk al-Ṭawā'if が到来すると、北部キリスト教徒によりレコンキスタが進行する。それとともに、エリアの範囲にも変化が生じ、かつてのイスラーム支配地やモサーラベ支配地はキリスト教世界に組み込まれていった。それとともに、基本的に敵対する3つのエリアを交易で結びつけることに貢献してきたユダヤ教徒たちは、自分たちの政治的立場を要求されるようになった。メシアを信じ、トラーに添った生活をしてきた彼らにとって、商業活動こそが生活のすべてであり、政治には基本的に関わらないことを常としてきた。そのドライな姿勢が、イスラーム教徒の疑惑を生み、キリスト教徒の反感を買ったといっ
ってよい。

レコンキスタを進めるキリスト教徒たちは、キリスト教徒の結集を図る方法としてコンポステーラを考えた。イスラーム軍との苦戦のとき、突如現れた謎の黒騎士。黒騎士は次々と襲いかかるイスラーム騎士を返り討ちし、キリスト教側の勝利をもたらした。勝利を確認すると、黒騎士は天に馬を駆って行って、消えていったという。その場を掘ると、聖ヤコブの遺骨が発見された。人々はここを巡礼の地としたが、これこそ別の視点で見ればキリスト教側の防衛線でもあり、また皮肉にもイスラーム教徒から学んだ巡礼の商業的役割であった。巡礼には多くの施設が必要となる。もっとも必要なのは、巡礼ルートの確保であった。

山岳部の多いイベリア半島には、ローマ時代から河川ルートが作られていた。換言すると、セファルドは古来よりの河川ルートを利用し、また巡礼ルートの発展にも関与したといえる。そうしたなかで、エブロ川 Rio de Ebro は特異な地位を占める。カタブリア地方に端を發し、ナバーラ、アラゴン地方を経て、カタロニア地方で地中海に合流する全長910キロの川である。中流・下流を有するナバーラ地方とアラゴン地方の主要都市はエブロ川流域に建設されたが、広い川幅をもち、周囲が山地で険しいなか、水路を提供してくれるエブロ川の意味は少なくない。ナバーラ地方の南端の町、トゥデーラはエブロ川に建設された町である。

中世において、ユダヤ交易ルートが特異な存在であったことは一面の事実である。キリスト教世界とイスラーム教世界の政治的、経済的、宗教的な対決のなかにあって、両者はけっして互いを譲ることをしなかった。これは交易にもあらわれていて、ムスリム商人がキリスト教圏

にはいって商売することは稀だったし、ヨーロッパのキリスト教徒が一部の例外を除いて、実際にイスラム世界で交易する姿を見ることもほとんどなかった。ムスリムがいうダール・アル・イスラーム Dār al-Islām とハルブ・アル・イスラーム Ḥarb al-Islām ははっきりと国境をもっていたのである。この例外的存在がスペインのモサーラベと南フランス・ラングドックのカタリ派であった。そこでは同じ町にモスク、教会、シナゴグが共存していたことが知られて⁽⁸⁾いる。

もともと、カルヴァン派プロテスタントが誕生する以前のキリスト教・カトリックには商業活動を嫌悪するきらいがなかった。ヴェネツィア商人が近東で活躍できたのは、カトリックの教義から幾分自由であったためだともいえる。一方、商業を重視したイスラーム世界だが、ナルボンヌなどの一部の町を除いて、キリスト教圏においてそれと出向くわけにはいかない。その仲介的存在はユダヤ教徒であった。そのため、ユダヤ商人はムスリム商人とは別種のルートをもっていた。地中海世界を例にとれば、アンダルシアのムスリム商人はメッカへの巡礼ルートを利用して、北アフリカへのルートを使用した。一方、セファルドたちは南フランスを迂回するルートを利用した。これは12世紀以降、顕著になるルートで、その時代はそのまま世界的に商業が発展した時代である。とりわけ、アンダルシアなどで北アフリカから渡来したムワッヒド朝がユダヤ教徒を弾圧したために、多くのユダヤ教徒がアンダルシアを去った。コルドバ生まれの哲学者のマイモニデスもこのとき、アンダルシアを去って、各地を転々として、最後はエジプトのフスタートに移り住んでいる。グラナダ生まれのユダヤ人・サウル・イブン・ティブブーン Juda ben Sawl ibn Tibbun⁽⁹⁾はその膨大な蔵書をもって南フランスのリユネルに移った。

南フランスは歴史的にユダヤ教徒を厚遇する政策をとってきた。とくにルネ王の時代⁽¹⁰⁾にキリスト教世界で反ユダヤ政策、ユダヤ十字軍が組織されるなかで、南フランスのプロヴァンス公国はユダヤ商人の活動に支援を与えたため、多くのユダヤ商人をアンダルシアやラインラントから集める結果となった。中世から近世にかけて、プロヴァンスはユダヤ教徒にとってはなかなか住み心地のいい地域となったこともあって、いくつもユダヤ教徒の共同体が形成された⁽¹¹⁾。

ユダヤ教徒が交易の必要から旅に出ることは少なくなかったが、彼らの特異な生活形態から拠点拠点にコミュニティがある必要性があった。彼らのルートは巡礼ルートも兼ねる形で、エルサレムへつながっていた。エルサレムを中核として、インドのユダヤ教徒もセファルドも交易が可能になったともいえる。

2. トゥデーラのベンジャミンの時代

いまでこそナバーラの首都としてパンプローナが有名であるが、古都トゥデーラはかつてはナバーラの中核的役割を果たしていた。地理的に見ると、トゥデーラはナバーラの南端である

が、アラゴン、カスティーリャ、カタラン、ラングドック、アキテーヌへの交通の要所であった。近隣にはローマの遺跡も残っており、その豊かな大地から生産される農業作物はアンダルシアに匹敵するものがある。ピレネー山脈に進出したイスラーム軍はここに駐屯し、イスラーム都市として機能し始めたのはツール＝ポワチエ間の戦い以降である。北アフリカからイベリア半島に侵入し、アンダルシアを征服したイスラーム軍は、720年、南フランスのナルボンヌを包囲した。西ゴート王国の影響の強い同地を離れたイスラーム軍は、北部に軍を進め、721年、トゥールーズを攻撃した。さらに軍を進めた結果、アストリウス王国から援軍を請われたカール・マルテルの軍に敗退したが、イスラーム軍の支配を比較的受け入れたピレネー山脈の北部を支配下に置いた。778年、カール大帝はサラゴッサを攻撃し、ついで『ローランの歌』(*Chanson de gestes*)で有名なロンスポーの戦いとなったのである。この戦いを通じて、キリスト教徒側はエプロ川河口までイスラーム軍を駆逐することに成功したのである。756年に後ウマイヤ朝が成立すると、レコンキスタを推進するアラゴンのキリスト教徒との戦いが激しさを増していった。イスラーム都市であったトゥデーラも、1114年(異説では1119年)、キリスト教徒の手に落ちた。⁽¹²⁾一時は優勢を誇っていたレコンキスタ側だが、1130年モロッコからイブン・ターシュフイーが渡来すると、混乱を極めた。「ニジェール川からエプロ川にかけて、2300のモスクが彼の名を唱えた」⁽¹³⁾。しかし、エプロ川を越すことはついにできなかった。

トゥデーラにいつごろからユダヤ教徒が住むようになったのか不詳だが、⁽¹⁴⁾トゥデーラは、ベンジャミンの他にアブラハム・イブン・エズラ Abraham ibn Ezra (1092年頃～1164年頃) やユダ・ハレヴィ Judah ha-Levi (1110年頃～1180年) の生地としても知られている。ベンジャミンの生没年は不明だが、彼の旅行は1160年ごろに始まり、ユダヤ暦4933年(1172年から1173年)に終わっていることを考えると、トゥデーラの生んだ3人の逸材がトゥデーラの宗教的変貌とともに生きたことが分かる。

同時代のユダ・ハレヴィのエルサレム巡礼が海路に依っているのに対し、ベンジャミンは各地のユダヤ社会を垣間見たかったのだろう、極力、陸路に頼っているふしが窺える。その結果、⁽¹⁵⁾ベンジャミンは同時代の各地の様子を目撃している。

中世の旅行記の多くが旅行後からだいぶ時間が経ってから書かれたものが少なくないのに対し、ベンジャミンの『旅行記』(*Sefer ha-Masa'ot*)は旅先で記録したものと推定される。だからこそ、滞在が長かったと思われるコンスタンティノーブルの記録は詳細を極めているのである。その結果、時間的経過によるある種の脚色も抑えられているはずである。しかも、ベンジャミン自身、自分を余り語ることがない。自己満足、誇大妄想の懸念が少なくない中世の旅行書にあって、自分に続く商人旅行家のための情報提供をしているかのようだ。その意味では、現代の旅行ガイドブックと合い通じるものがある。また、その結果、ベンジャミンについては不明な部分も少なくない。

それにしても、数ヶ国語を自由に操ったベンジャミンが、なぜヘブライ語で故郷に書簡を送ったのだろうか？ ヘブライ語は12世紀にアンダルシアで文学作品としての詩が作られる以前

は、経典の言葉でしかなかった。中世に書かれたレスポンスであってもヘブライ語が使われるのは稀で、大半は自分たちの話し言葉をヘブライ文字で記述した。ベンジャミン自身、ナバーラにいたときはラディーノを使っていたはずである。同時代に書かれた幻の書といわれた『ザハル』(Zahar)にしても、ラディーノで書かれている。

ベンジャミンは各地に出向くユダヤ商人の草分け的存在であった。事実、彼の旅行記が書かれたあと、記録魔ともいわれたユダヤ社会に大きな影響を与えたらしく、何人もの旅行家が旅行記を残している。⁽¹⁶⁾

3. 宗教的不寛容の時代

ベンジャミンが生きた12世紀という時代は、世界的に商業活動が活発化する時代であったが、同時にキリスト教圏やイスラーム教圏では異教や異端に対して激しい弾圧が始まっていった時代でもあり、その渦中にユダヤ教徒が置かれたといっても過言ではない。十字軍はイスラーム教徒との戦争を体験させ、レコンキスタを勝利に導く多くの騎士を輩出させた。イスラーム世界の戦略を敗戦から学んだキリスト教徒たちは、その苦い体験をレコンキスタに向けた。その過程で、十字軍をキリスト教圏でも組織したが、それがカタリ派に向けられたアルビジョワ十字軍とユダヤ十字軍であった。アルビジョワ十字軍を実質的に提唱したブランシュ・ド・カスティユ Blanche de Castille はその名のとおり、カスティーリヤの出身であり、第6回十字軍を率いたルイ⁽¹⁷⁾聖王の実母である。

十字軍が単なる狂信的動機から組織されたものでないことは明白な事実だが、商業的成功者としてのユダヤ教徒に対しても十字軍が組織されたことはその事情を雄弁に⁽¹⁸⁾語ってくれる。宗教的不寛容はしばしば、利害関係の結果であったと短絡できるものではないが、またその事実を否定できるものでもない。理不尽な言いがかりが宗教を介在することによって、正当化されるのは今日まで続いてきたもので、キリスト教圏ではユダヤ教徒が標的にされてきたことは否めない。イスラーム世界では人頭税(jizya)を課すことによって、合法的に彼らを利用した側面がないでもなかった。また、ユダヤ教徒の側にしていても、信仰の自由を金銭で保障されるならば、受け入れられるものであった。しかし、いつもいつも話の分かる相手だけではない。宗教的敬虔さはしばしば狂信にもなりえる。モロッコから飛来したムワッヒド朝がアンダルシアのユダヤ教徒を追放したのはその一例に過ぎない。

宗教的狂信はしばしば多くのことを夢想しながら、仮想敵を誇張、誇大化することを怠らない。それらは様々な憶測を生みながら、根拠ない噂となって各地に流布する。ベンジャミンはそうした噂を確かめるためにも、各地のユダヤ社会を垣間見、そして故郷にそれを教えようとしたと考えることができる。その情報をユダヤ社会すべての財産にするためにも、ベンジャミンはユダヤ・アラビア語でもなく、ラディーノでもなく、すべてのユダヤ知識人の共通言語で

あったヘブライ語で記述する必要があったのである。

4. ベンジャミンの記録したキリスト教世界

ベンジャミンの写本として重要なものは下記の3つである。

- (1) 最古の写本で13世紀のものと想定される。British Museum にあり、1907年の Adler 本の底本となった。
- (2) 15世紀のもので、1430年にピサのイツハクが写したもの。
- (3) 15世紀の終わりにウィーンのエプシュタインが写したもので、1556年の Ferrare 本の底本となった。

刊本も多く、1453年にコンスタンティノーブルのソチーノ印刷所で刊行されたのが最初のものである。その後、1556年にフリーブルクで、1633年にライデンで、1696年にアムステルダムでも刊行されている。

以下、抜粋ながら、ベンジャミンの記録を見てみよう。原文はゴシック体とし、訳注は【 】内にいれ、補足は()内に入れ、筆者のコメントは各パラグラフの後に記してみた。Adler 版の原文はヘブライ文字を数字として使用しているの、文末の〔 〕内にページ数に相当するヘブライ文字をローマ字表記で記した。⁽¹⁹⁾

これはラビ・ヨナの息子のベニヤミン【ベンジャミンのこと】の旅行記である。ヨナの呼息が天国にあられんことを。ラビと呼ばれたベニヤミンは生まれ故郷のトゥデーラをたち、いくつもの外国を通して、この本が出来上がった。彼が行ったどこも、彼が見たもの、信頼すべき人から聞いたものすべてを記録した。これはセファルドの地では聞いたこともないものばかりだ。各地に住む賢者や著名人のことにも言及している。ユダヤ暦4933年、カスティーリャに戻るときに彼はこの本をもってきた。〔alef〕

序文の部分で、写本によって異なる部分も少なくない。ベンジャミンは1130年ごろ、トゥデーラに生まれたと想像されている。父親がラビであったこと、たいへんな教養の持ち主であったことも窺い知ることができる。

わたしはまず、故郷の町【トゥデーラのこと】からサラコスタ【現在のサラゴッサ】に旅した。それから、エプロ川を利用してトルトサに着いた。そこから2日かけて、巨大な遺跡やギリシャの建物のある古い町であるタラゴーナに行った。セファルド【スペインのこと】の地方のどの建物にも見られないものばかりだ。海沿いに、2日かけてバルローナ【バルセローナのこと】に向かった。そこは、ラビ・シェシエト、ラビ・シャルティアル、

ラビ・サラマ、ラ（ビ）・アブラハム・ベン・ハスダイといった（ユダヤの）聖人、賢人、著名人がいた聖なるユダヤ居住区だ。【バルセローナは】小さいが、美しい町で、海岸がある。商人たちは、ギリシャ、ピサ、ジェノヴァ、シチリア、アレキサンドリア、イスラエル、アフリカやその他の各地から来ていて、それぞれの民族服を着ている。そこから1日半かけてジェローナに行った。そこはユダヤ教徒の小さな居住区がある。〔beyt〕

イベリア半島の記述はいたってあっさりしている。セファルドたちがよく知っているから、故郷に伝える意味も感じなかったのであろう。サラゴッサからトルトサまでの船旅は極めて単調だったはずで、見事なはずのエプロ川の光景も描いていない。ベンジャミン自身、関心は自然ではなく、人間、それも他地域に住むユダヤ教徒の生活ぶりだった。

（ジェローナから）3日かけて、ナルボンヌに着いた。そこは（ユダヤの）学問で昔から知られたところで、当地のトーラー研究は各地に流布した。（中略）ナルボンヌには300人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。〔gimel〕

ベンジャミンは、南フランスに行って初めて当地のユダヤ教徒の規模に言及している。そしてこれはその後の彼の旅行の中心となる関心事でもあった。ユダヤ教徒から見た同時代書となっている彼の『旅行記』は、何よりもユダヤ社会を垣間見ることでもあった。なお、ベンジャミンの記述するユダヤ教徒の居住者は、定住者だけではなく、各地から集まってきた人々も含んでいるのではないかと考えられている。一族の家長の数ではないかという意見もあれば、男性だけで女性は数に入っていないという見解もあるほどである。ナルボンヌはアンダルシアのイスラーム教徒の学者やフランスのキリスト教徒の学者やイタリアの学者が出会うことが出来る場所であり、ユダヤの学問の中心地として、学問や医学でも知られていた。イスラーム世界で活躍したユダヤの学者の著書はナルボンヌに運ばれ、売買された。ユダヤの書店ではそうした本を150点もち、注文に応じて写本を書き上げ、製本して売っていたことが知られている。⁽²⁰⁾

（ナルボンヌから）ベジエまでは4パラサング【パラサングとはベルシャで使用される単位で、1パラサングは約4マイル】だ。そこは学者たちの（ユダヤの）居住区だ。彼らの指導者はラビ・サラマ・ハルファタとラビ・ヨーセフとラビ・ナタナエルであった。そこから2日かけて、ハル・ガアシュことモンペリアに向かった。そこは商業で栄えた町であった。海までは1パラサングの距離にあり、あちこちから交易にやって来ていた。（中略）モンペリアからリュネルまでは4パラサングである。そこにはユダヤ居住区があって、日夜トーラーを研究していた。（中略）リュネルには多くの学者がいて（中略）そのなかにはセファルドの学者のラビ・ユダ・イブン・ティッボーンもいる。学生たちは遠方からトーラーを学びにやって来ており、勉学を続ける限り、居住区から食事を与えられ、家をあて

がわれ、衣服をもらっている。ユダヤ共同体には賢人、知識人、聖人がおり、出身地を問わず、彼らに救いの手を差し伸べている。(ユダヤの) 共同体には300人ほどいる。神が彼らを祝福されんことを。〔gimel~dalet〕

そこからポスキエール【Asherはボスケールのことではないかと注記している】までは2パラサングの距離である。そこは約400人のユダヤ教徒が住む大居住区であり、大ラビのラビ・アブラハム・ベン・ダーウィドを権威とするイエシュヴァがある。はるばる遠方から(大ラビの) トーラーを直接学ぼうとやって来た。人々は彼の家にお邪魔して、彼に教えを願った。(中略) そこから、サン・ジールの出城までは4パラサングである。そこには約100人のユダヤ教徒が住んでいる。(中略) そこから、アルルまでは3パラサングほどである。そこには200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略) そこからマルセイユまでは3日の行程である。そこには大学者や賢人がいて、2つのユダヤ居住区があり、300人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。〔dalet~he〕

ベンジャミンの記述はユダヤ居住区の住民数、指導者の名前、学者の名前を必ず記録するというもので、その意味では単調な文章が続く。しかし、その単調な情報こそ、故郷に住む同胞に不可欠なものであったことは想像に難くない。マルセイユからの旅は船旅になる。本来はトルトサから乗船することは可能であったが、南フランスのユダヤ居住区を観察したい気持ちが陸路の旅を選ばせたのであろう。しかし、マルセイユから北イタリアはいまでもトンネルの多い、険しい地区で、海沿いの道よりはアルプスを越える道が選ばれてきた。この難所を突破する方法は海路なのであるが、中世の時代、大型帆船ではない1本マストの帆船の旅は危険も伴った。ジェノヴァは万一のときの軍船への転換が容易であるという理由で、マルセイユ(ときにはシチリアやバルセローナ)までガレー船を使用した。ガレー船に2つのフロアとデッキを設けた。そのスペースを商人たちは借り受けて、「船室」にしたのである。

マルセイユから船に乗り、4日かけてジェノヴァに到着した。そこは海に面したところにある。(ジェノヴァには) 2人のユダヤ教徒が住んでいて、1人はサムエル・ベン・サリムと彼の兄弟で、2人はセウタから移住してきていた。2人ともすばらしい人物だ。町は城壁に囲まれていて、住民は国王によって統治されていない。すべて住民が判定する。どの家にも塔があって、万一のときは塔に籠城して戦うことができるようになっている。彼らは海の司令官だ。彼らはガレー船と呼ばれる船を建造している。(ガレー船は)エドム【イタリアならびにキリスト教国のこと】、イシュマエル【北アフリカのこと】、ギリシャ、シチリアを攻撃し、略奪するためのものだ。ジェノヴァはあちこちの国から排他されている。ピサとはいつも絶えず戦争状態にある。ジェノヴァからピサまでは2日の行程だ。〔he~vav〕

少々狂信的なムワッヒド朝はモロッコやアンダルシアでユダヤ教徒を追放した。そのあおりを受けて、ジェノヴァに移住したユダヤ教徒がいたが、その数はけっして多くはなかった。ジェノヴァにはユダヤの居住区はなく、当時のジェノヴァの法律では、ユダヤ教徒やイスラーム教徒は3日しか滞在を許されていなかった。ただ別の法律もあって、教会に灯す蠟燭のために年間、3ソリド（金貨）の税金を支払えば、滞在が許された。

ピサは大きな町だ。戦争の攻撃を防ぐためにのべ1万の塔が家々にある。住民は鍛えられた男たちだ。彼らは王もいなければ、君主もいない。自分たち自身ですべてを決断する。この町には20人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。（中略）ピサからルッカまで4パラサングの距離である。そこはロンバルディア国の国境の町で、40人のユダヤ教徒が住んでいる。
〔vav〕

遠方からはるばるやって来た同胞のユダヤ教徒に対し、旅をねぎらい、宿を提供し、食べ物を与えるのは、そこに住むユダヤ社会の指導者の他にはいない。ベンジャミンがユダヤ居住区の規模、指導者の名前を必ず記録しているのはそのためだろう。

偉大なるローマへは6日かかる。ローマはキリスト教の最高峰である教皇庁のあるところで、200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。彼らは名誉ある地位にいて、人頭税も支払わず、全キリスト教徒の精神的指導者のアレクサンドル【3世】教皇を認知している。（中略）ローマはティベル川によって2つに分かれている。聖ピエトロ寺院のある側には、ユリウス・カエサルの大宮殿もある。町にはいくつものすばらしい建造物があって、他のどの世界とも違っている。〔vav-zayn〕

ローマにはとりわけ感激したらしく、詳しい記録を残している。カタコンベのことも書いているし、ローマ帝国とユダヤ教徒のことにも触れている。単なる商人ではない、なかなかの知識人であったことを窺わせる記述だ。ローマからコンスタンティノーブルに遷都したコンスタンティヌス帝のことも記しているところを見ると、当時のユダヤの教養人の姿が写し出される。ハドリアヌス時代に殉死した10人のユダヤ教徒のことにも触れているのは、弾圧され迫害され虐殺された歴史をけっして忘れない現代のユダヤ教徒と共通のものを感じさせる。その根底にあるのが、被害者意識であることもどこか共通している。

ベンジャミン自身はとくに触れていないが、ベンジャミンが旅行する20年ほど前の1140年、同郷のトゥデーラ出身のトラー学者で詩人のアブラハム・イブン・エズラはローマに来て、赤貧生活をしていた。トラーの注解書にはラシーとともに必ず並ぶ大学者は、ローマに住む他のユダヤ教学者とは異質のものがあつた。彼らはトラーやタルムード以外のことを口にすることはけっしてなかったが、アブラハム・イブン・エズラは古代ユダヤの占星術や当時のセ

ファルドの天文計測について話すことを好んだ。

ローマからカピアまで4日の行程だ。カピス王が建てた大都市で、とても洗練された町である。けれども、水は悪く、国中が熱病に冒されている。300人ほどのユダヤ教徒が住んでいるが、そのなかには大学者や著名人もいる。(中略) そこからポツォエルに向かった。そこは大ソレントと呼ばれるところだ。ツィール・ベン・ハダドによって建設された町で、彼はダーウィド【ダビデのこと】王を恐れて逃れてきた。海は波をあげ、町を両側から覆っている。現在、市場や町の中央にある塔を見ることができる。(中略) 山々を越えてナポリに到着した。ナポリはとてもたくましい町で、海に面してギリシャ人が建設した町である。500人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。当地の指導者はラビ・ハズキア、ラビ・シャローム、ラビ・エリヤ・ハコーヘン、ラビ・イツハクである。そこから、海沿いにサレルノに行った。そこはキリスト教徒の医学学校【サレルノ大学医学部のこと】があるところだ。600人ほどのユダヤ教徒が居住している。〔het~tet〕

サレルノ大学医学部は、パリ大学神学部、ボローニャ大学法学部と並ぶ、中世キリスト教圏の最古の大学として有名であった。アブラハム・イブン・エズラも一時サレルノに滞在し、ヘブライ語聖書辞典である『食卓の辞典』(mahberet ha-arūkh)を書き上げている。アンダルシアのイスラーム文化に影響された形で開花したヘブライ語ルネサンスは、セファルド出身のユダヤ教徒によって引き継がれていった。各地にイェシュヴァができたのは、何よりもユダヤ社会の経済的基盤があつたことだが、多くのユダヤの知識人たちにヘブライ語を習得させる結果ともなった。ヘブライ語が地中海世界に広く散在するユダヤ社会との伝達言語の役割をもち始めたのが、12世紀以降の特筆すべき事実でもあった。

そこ【サレルノのこと】からアルマルキまでは半日の距離だ。(アルマルキには)20人ほどのユダヤ教徒がいて、そのなかには医師のラビ・ハナナアやアブ・アル・ギール君主の息子のラビ・アリーシャがいる。住民は交易に従事する商人で、縫い物をしたり農業をしたりしない。というのも、彼らは山間部や高台に住んでいるからである。どんなものもお金で買う。それでも、果物が豊富だ。ブドウ、オリーブ、果樹、柑橘類がとれ、戦争もない。そこからベネヴェントまでは1日の行程だ。そこは海と山の間にある。200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。〔yod〕

アドリア海に向かうベンジャミンが実際に1つの町にどれくらい滞在したのかは不明である。現在のガイドブック顔負けのくらい、町と町の行程は記録しているが、実際の滞在については多くは語ってはいない。そして、ユダヤ教徒が住む町以外には行かなかつたのかと思えるほど、彼の記録する町にはユダヤ居住区がある。カウシエルとシャバトを厳密に守る中世のユダヤ教

徒にとって、同胞のいない町は行くべきところではなかった。

(ベネヴェントから) プルの土地であるフィリア地方【アブリア地方のこと】のメルフィまでは2日かかる。(メルフィは)200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・アヒマアツ、ラビ・ナタン、ラビ・イツハクである。メルフィから1日の行程でアスコリに着く。そこには40人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)そこから2日で海に面したトラーニに行ける。(トラーニは)エルサレムに向かう各地の巡礼団が集まるところだ。港もいい。そこには200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)とても大きく、美しい町だ。そこから、1日かけてバーリ【パリのこと】のコールに行く。そこはシチリアのウィリアム王によって破壊された大都市である。破壊された現在、ユダヤ教徒はもちろん、非ユダヤ教徒も住んでいない。〔yod~yod-alef〕

1156年、シチリア・ノルマン朝のウィレムス悪王ことウィリアム1世はバーリを破壊した。1169年にウィレムス善王ことウィリアム2世によって再建が命じられた。ベンジャミンがバーリを訪れたのは再建が命じられる以前だったことが分かる。ベンジャミンの記録は客観的で冷静な記述が少なくない。個人的感情がまったく感じられず、事実としての情報をユダヤ社会に伝えようとした。それが商人としてのベンジャミンを旅させた動機といえなくもない。自分が実際に見た姿をこれからの商業活動に役立てて欲しいという記述である。

そこからタラントまでは1日半の行程だ。そこはカラブリアの支配に置かれていて、住民はギリシャ人である。大きな町であり、300人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。そのなかには知識人もいて、ラビ・マイル、ラビ・ナタン、ラビ・イスラエルを指導者としている。タラントからプリンディシまでは1日かかる。そこは海沿いにある町だ。10人ほどのユダヤ教徒が住んでいて、染物業を営んでいる。そこからオトラントまでは2日かかる。ギリシャの対岸にある町だ。ここには500人ほどのユダヤ教徒が住んでいて、ラビ・メナヘム、ラビ・カラブ、ラビ・マイル、それとラビ・マーリを指導者としている。オトラントからコルフまで2日の(船)旅だ。そこにはラビ・ヨセフというユダヤ教徒だけが住んでいる。シチリア王国の支配も終わっている。〔yod-alef〕

ベンジャミンが伝えるユダヤ社会は概して小規模である。彼が伝えるユダヤ教徒の数はやはり実数ではなく、家族数であると考えるのが妥当かもしれない。ラビの称号をもつ健全で教養あるユダヤ教徒が独身でいるはずはなく、また家族もいないとは考えられないからである。いつどこから来ても、同胞のユダヤ教徒を迎え入れるユダヤ社会があってこそ、彼らの活発な商業活動が可能になったことを示唆してくれる。ベンジャミンはギリシャに渡る。

そこからラルタ地方までは2日の(船)旅だ。そこではギリシャ王【ビザンチン皇帝のこと】のエマニュエルの統治が始まったばかりだ。100人ほどのユダヤ教徒が住む居住区がある。指導者はラビ・シャルヒーフとラビ・オルクである。そこからアフィロンまでは2日の行程だ。そこにはラビ・サバタイを指導者に30人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。ここから1日半かけてアナトリカに辿り着く。海峡にある町だ。ここからは1日でパトラスに着ける。ここはギリシャ【マケドニアのこと】のアンティゴノス王が建設した町だ。王はアレキサンドロス(大王)の4人の後継者の1人である。町のあちこちには大きな建造物が残っている。ここには50人ほどのユダヤ教徒が住んでいて、指導者はラビ・イツハク、ラビ・ヤコブ、ラビ・サムエルである。半日の海路でキフト【レバントのこと】に着く。そこには100人ほどのユダヤ教徒がいて、海沿いに住んでいる。〔yod-alef〕

滞在した町についてはけっして記述漏れをしないかのような簡単な記述である。ユダヤ社会の指導者の名前を知ることが、ユダヤ教徒の商人たちにとっては不可欠な知識だ。旅の安全と近隣の情報は彼らから得ることが出来る。それにしても、ベンジャミンの辿ったルートは、現在も使用されているものと大差ないのに驚く。プリンディシとパトラスは今も毎日、フェリーが運行しているほどだ。陸路に比べて、海路に費やす時間は中世を思わすものがある。

そこからクリースまでは1日半かかる。そこでは200人ほどのユダヤ教徒が離れて住んでいる。自分たちの土地をもち、縫い物業や農業を営んでいるからである。指導者はラビ・サラマ、ラビ・ハイム、ラビ・ヤドツイーフである。そこから、3日かけて大都市コリントに着く。ラビ・リオン、ラビ・ヤコブ、ラビ・ハズーフを指導者に300人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。そこから2日かけると、大都市のティバスだ。そこには2000人ほどのユダヤ教徒が住んでいて、絹織物の優れた技術をもっているため、ギリシャのあちこちから絹布地を買い付けに来ている。ここにはミシュナやタルムードに精通している学者もいる。(中略)コンスタンティノーブルを除いて、ギリシャにこれほどの町はない。ティバスからイグリポまでは1日の行程だ。そこは海岸にある大きな町で、あちこちから商人がやって来ている。200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。〔yod-be〕

当時はコリントの運河はなかったから、陸伝いにペレポネソス半島からギリシャ本土に行くことができた。ビザンチン帝国支配下ながら、陰りが見え始めたことを暗示してくれる。

そこから1日でヤブー・サトリーサ【現在はなく、中世に滅んだと思われる】に着く。そこは海岸にある町で100人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・ヨセフ、ラビ・アルツォール、ラビ・イツハク、ラビ・サムエル、ラビ・ナタニーフである。ここからラボニカまで1日の行程だ。そこには100人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。そこからシノ

ン・ピトモまでは1日の行程だ。そこには50人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・サラマとラビ・ヤコブだ。町はバルキーフの丘の麓にある。彼らは獰猛な動物のようだ。山から降りると、ギリシャ人の農地を襲う。誰も彼らのもとに出向こうともしないし、攻撃しようともしない。彼らには王もいない。彼らはナザレ人の信仰【キリスト教のこと】を棄て、ユダヤの名前をもった。事実、彼らは自分たちのことをユダヤ教徒といっている。彼らは自分たちの祖先をユダヤだとしている。彼らは盗みをして、相手に会って挨拶する。ギリシャ人との殺し合いは終わりがない。彼らには法がないのだ。〔yod-be ~yod-dalet〕

あれほどユダヤ居住区の指導者の名前を書き連ねてきたベンジャミンだが、ラボニカについては指導者の名前が記されていない。100人規模といえば、けっして小さくなかったはずで、1つの謎である。ギリシャの記述はテーベを除いて、概して簡単だが、シノン・ピトモの無法状態にはほとんど驚いた様子だ。

ここからランディーディーニ【ガルディーキのこと】までは2日かかる。廃墟となっていて、少数のギリシャ人やユダヤ教徒しかいない。ここから、アルミーロまでは2日の行程だ。海に面した大きな町で、ヴェネツィア人、ピサ人、ジェノヴァ人や各地から集まってきた商人が住んでいる。広範囲にわたって、400人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)そこからヴィシーナまで1日かかる。100人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・サバタイ、ラビ・ソロモン、ラビ・ヤコブである。ここからサロニカまでは2日の行程だ。(サロニカは)アレキサンドロス【大帝】の4人の後継者の1人であるセレウコス王が建設した町である。たいへん大きな町で、500人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・サムエルとその息子で、ともに【ユダヤの】学者である。彼は【ビザンチンの】領主からユダヤの指導者として公認されている。ここにはラビ・サバタイと義理の息子のラビ・アリーフとラビ・ミカエルもいる。ユダヤ教徒は迫害されていて、絹織物に従事して生活している。〔alef-gimel〕

ビザンチン帝国がユダヤ教徒をしばしば弾圧していたことは知られているが、ベンジャミンの記録もそれを立証している。それにしても、たんたんとききつづけるベンジャミンを見ると、「悲しいユダヤ人」とは縁遠いものがある。

ここからダムティートリシまで2日かかる。50人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)ドラマまでは2日の行程だ。そこには140人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)そこからカリストポーリまでは1日で、20人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。アビドスまでは3日の行程だ。海が入り組んだところであって、山と山に囲まれている。大都市コン

スタンティノーブルまではここから5日の行程である。ギリシャと呼ばれるカディージーアノス全領土の首都である。ここにはエマニュエル皇帝が住んでいる。彼のもとには24人の大臣がいて、それぞれがコンスタンティノーブルに宮殿をもち、城と町を保有している。(中略)コンスタンティノーブルの周囲は18マイルあり、半分は海に囲まれ、残り半分は陸に囲まれている。海からの入り江は2つあり、1つはロシア【黒海のこと】へ、1つはセファルドの海【地中海のこと】に出ている。〔yod-gimel~yod-dalet〕

コンスタンチノーブルの記述は詳細である。それだけ驚くことが少なくなかったのであろう。「コンスタンティノーブルはたいへん忙しい町である」こと、「ギリシャ人はとても金持ちで金や宝石がたくさんある」こと、「絹の服を着ている」ことを記録している。

ユダヤ教徒地区には2000人ほどのラビ派と500人ほどのカライ派のユダヤ教徒が住んでいて、柵で区切られている。学者のなかには賢人もいる。〔yod-dalet〕

ラビ派とはミシュナやタルムードを信じ、ラビに指導されているユダヤ教徒だが、カライ派とはモーセ5書のみを信望し、別種の共同体を形成していたユダヤ教徒のことで、両者が対立していたことを記している。

彼はまた、ビザンチンのゲッターのこと、コンスタンティノーブルの町ではなく、郊外に住んでいること、コンスタンティノーブルには海路でしか行けないこと、馬に乗ることも禁じられていることを記録している。ユダヤ地区の水は不潔で、ギリシャ人はユダヤ教徒を迫害しているなど、いつになく詳細な記録となっている。ベンジャミンのコンスタンティノーブルの滞在が長かったことを感じさせるとともに、多くの故郷の人々が知りたがった情報だったとも思われる。

コンスタンティノーブルからラエデストスまでは2日の行程だ。400人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・モーセ、ラビ・アビジャ、ラビ・ヤコブである。そこから2日ほどでカリポリスに着く。そこには200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)カレスまでは2日かかる。50人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)ここからミチレネ島までは2日の【船】旅だ。島の10個所にユダヤ教徒が住んでいる。キオス島まではさらに3日かかる。400人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(中略)サモス島までは2日で着く。300人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。サモス島からロードス島までは3日の【船】旅だ。400人ほどのユダヤ教徒が住んでいて、指導者はラビ・アッバ、ラビ・ハンナネル、それにラビ・アリーフである。〔yod-zayn〕

聖ヨハネ騎士団が住むロードス島は、当時はキリスト教世界とイスラーム教世界の国境とな

っていた。そしてこれからイスラーム世界へ足を踏み入れることになる。

(注)

- (1) いわゆる「ユダヤ人」の呼称は西欧キリスト教世界のアンチ・セミティシズム (anti-Semitism) の視点からのもので、本来はけっして適切な表現ではない。日本の高校世界史の教科書ではそうした観点もあって、ヘブライ人と呼ぶようになりつつある。しかし、中世の時代にあっては古代イスラエルの12支族の子孫だとはとても信じられない状況であり、混血も少なくないのでこの名称も不適切と考え、敢えて宗教的視点から本稿では「ユダヤ教徒」の名称を使用する。母系社会であったユダヤ社会は、とりわけディアスポラ以降は強姦が絶えず、不本意な出産が少なくなかった。それでも、母親がユダヤ教徒である限り、ユダヤ共同体社会は父親が誰であれ、ユダヤ共同体の一員として受け入れ、ユダヤ教に則した幼児教育を施した。そのことを配慮すると、「ユダヤ教徒」という名称が適切であると考えたためである。
- (2) セファルドの原義はヘブライ語で「スペイン」のことを意味し、本来はスペインに住んでいたユダヤ教徒を指した。1492年のカスティリャ＝アラゴン連合王国の発令したユダヤ追放令で各地に散在したため、のちには南ヨーロッパや北アフリカに住むユダヤ教徒も包括して指すようになった。なお、「アシュケナージ」とは原義はドイツのことを意味し、もっぱら中部・北ヨーロッパ出身のユダヤ教徒を意味する。
- (3) バビロン捕囚時代のユダヤ教徒たちがバビロン川（ティグリス＝ユーフラテス川）を見ながら、ヘbron川への郷愁を抱いたことは『旧約聖書』の「詩篇」にも描かれているが、それが歴史的真實だったかどうかは別として、ユダヤ教徒の心理的感情を表現していることには注目すべきものがある。
- (4) トゥデーラのベンジャミンの伝記部分については主に下記の文献に拠る。*Encyclopedia Judaica*, vol.IV, pp.535-538, Jerusalem, 1972, Richard Ayoun et Haïm Vidal Séphiha, *Sefarades d'hier et d'aujourd'hui*, Paris, 1992, pp.67-69. 中世ユダヤの逸材であるベンジャミンだが、その経歴はあまり知られていない。ポール・ジョンソン著、石田友雄監訳『ユダヤ人の歴史』、上巻、285頁はベンジャミンを宝石商と推定している。なお、ベンジャミンの呼称だが、ヘブライ語に即したカタカナ表記を試みるならば、ベニヤミンが適切だが（『創世記』第35章、第18節）、日本ではベンジャミンという英語名が親しまれていること、英語圏での翻訳が今も刊行されていることを考慮して、引用以外は敢えてベンジャミンとした。
- (5) 1999年8月～9月にかけて、ベンジャミンの足跡を追うように筆者は実際にエプロ川沿いの旧道を車で走った。そのときの実地調査から、ベンジャミンの体験を実感できた部分も少なくない。実際、トルトサの市内には当時の船着場跡が残っているが、いくつもの山々を抜け、険しい渓谷を越えて流れるエプロ川は便利な交通路であった。川の流れも速いこともあって、上流から下流への交通路としては利用価値の高いものであったことは想像に難くない。エプロ川にほぼ沿うように街道もあるが、教会や修道院が点在していることから分かるように、コンポステーラの玄関であるパンブローナへはトゥデーラ経由が便利だったからと思われる。また、今回対象となったスペイン、南フランス、イタリア、ギリシャ、トルコは20数年かけて何度も陸路、海路、空路で訪れた地域であり、ベンジャミンの記録もそのときの体験があって理解できたところも少なくないことを注記しておきたい。
- (6) 訳出にあたってはトゥデーラ市で撮ってきた写真データをもとに行った。なお、この原文の原典については判明できなかった。José Ignacio Baile Ayensa, *Tudela-La Ciudad y Excursiones*, Tudela, 1998, pp.136-137
- (7) いわゆるスペイン語のこと。フランコ総統の死後、スペインは地方自治の政策を打ち出し、言語もそれに準じた。その結果、カタラン語、バスク語、ガリシア語が公用語となったため、いわゆるス

- ペイン語はカスティリヤ語となった。スペイン語 (español) という表現は中南米固有のものになり、スペイン本国では若い世代を中心にカスティリヤ語離れが進行している。1999年9月、カタラン語しか通じないモンブラン市 (カタロニア州) に滞在して、驚愕したものである。
- (8) 現在、コルドバだけがその痕跡を残しているが、かつてはアキテーヌのアルビーやベジエなどもその1つであった。アルビジョワ十字軍によって壊滅されたかつてのカタリ派の町は現在はその痕跡はないが、カタリ派がキリスト教として商業活動を公認したことは特筆すべきである。ルターが聖書を独訳する以前に、すでにオック語の聖書をもっていたことも驚異である。
- (9) Richard Ayoun et Haïm Vidal Séphiha, *op.cit.*, pp.64-66. イブン・ティッポーン家のユダは医学を修め、アラビア語やヘブライ語に堪能であった。ユダ・ハレヴィのユダヤ・アラビア語で書かれた作品の『ハザールの書』 (*Kitāb al-Khazār*) をヘブライ語に訳したことで知られる。一方、息子のサムエルはアルル、ベジエ、マルセイユ、トレード、バルセローナなどに住み、一時はアレキサンドリアにも住んだ。マイモニデスのユダヤ・アラビア語で書かれた作品である『迷える人々の導き』 (*Kitāb al-Dalīl al-Khā'irin*) をヘブライ語に訳したことで知られ、翻訳にあたってはマイモニデス自身にも問い合わせている。イブン・ティッポーン家には他にもモーセ、ヤコブが学者として後世に名を残している。
- (10) Danière Iancu, *Être Juif en Provence au temps du roi René*, Paris, 1998 は小冊子ながら、よく整理された研究書となっている。
- (11) 迫害もなかったわけではないが、プロヴァンスのユダヤ教徒は比較的自由な活動が許されていた。近世になると、アヴィニョン、カルバントラ、カヴァイヨン、サロンなどがユダヤ商業の中心的役割を果たすようになった。太陽王ルイ14世が彼らの経済的利益を奪おうと、国外退去令を発令したことは有名である。結果はスイスが銀行業を繁栄させ、経済難に陥ったブルボン朝はフランス大革命を早く招く結果になったのである。
- (12) Pierre Tuccho-Chala, *L'Islam était aux portes des Pyreneés*, Biarritz, 1994, pp.18-21, pp.94-96
- (13) *ibid.*, pp.91
- (14) *Encyclopedia Judaica*, Jerusalem, 1972, vol.XV, p.1425
- (15) 実際のベンジャミンの足跡については、Jose Ramon Magdalena, *Libro de Viajes de Benjamin de Tudela*, Barcelona, 1989 の付録地図がいい。また、Haim Beinart, *Atlas of Medieval Jewish History*, Jerusalem, 1922, p.44-45 はベンジャミンの記録した各地のユダヤ居住区の人数が記されている。
- (16) 詳しくは、Haim Harboun の一連の研究である、*Les voyageurs juifs du Moyen Age XIIe siècle*, Aix-en-Provence, 1986, *Les voyageurs juifs du XIIIe, XIVe et XVe siècle*, Aix-en-Provence, 1988, *Les Voyageurs juifs du XVIe siècle*, Aix-en-Provence, 1989, *Les voyageurs juifs XIIe siècle*, Aix-en-Provence, 1998 参照。とくに最後に紹介した本はベンジャミンの旅行のみを論じた300頁を超す力作である。また、ベンジャミンの抜粋も収められている、Elkan Nathan Adler, *Jewish Travellers 801-1755*, London, 1930 はリプリント版もあって便利である。
- (17) 拙稿「マンスーラの戦い」、『世界英雄と戦史』, 新人物往来社, 1999年, 180頁参照。
- (18) 拙稿「ユダヤ人迫害史」、『ユダヤ大事典』, 新人物往来社, 1997年, 70-71頁参照。
- (19) ベンジャミンの旅行記としては原典として、Marcus Nathan Adler ed., *The Itinerary of Benjamin of Tudela*, London 1907, rep. Frankfurt am Main, 1995 を底本として使用した。同書に収められている英訳も随時参照した。Benjamin の3人の翻訳者 (A. Singer 1983, Marcus Nathan Adler 1907, A.Asher 1840) の序文をすべて収めた、Joseph Simon, *The Itinerary of Benjamin of Tudela*, Malibu, 1983 も分かりやすい訳文となっており、参照することが少なくなかった。Rolf P. Schmitz, *Benjamin von Tudela-Buch der Reisen*, Frankfurt am Main, 1988 はドイツ人らしい厳密な訳となっているので、教えられることが少なくなかった。Jose Ramon Magdalena, *op.cit.*,

Barcelona, 1989 のカスティーリャ語訳の脚注には他書にない、文献的注釈が少なくなく、ベンジャミンの『旅行記』の深さを感じさせてくれた。Haïm Harboun, *Les voyageurs juifs XIIIe siècle*, Aix-en-Provence, 1998, pp.179-289 にはベンジャミンの仏訳が収められており、その脚注もさることながら、旅行記として読み易い訳文は大いに参考になった。なお、Sandra Benjamin, *The World of Benjamin of Tudela*, London, 1995 は Asher の英訳を引用しながら、当時の各地の状況を考察したもので、その根拠となった資料も注記されていて、個人的に興味深い記述が少なくなかった。

- (20) Sandra Benjamin, *op.cit.*, p.62, Salo Wittmayer Baron, *A Social and Religious History of the Jews, Second Edition*, New York/London, 1958, vol.VII, pp.138-140